

満洲引揚者による戦前の記憶と語り

——日本基督教団小田原十字町教会に着目して

湯川 真樹江

一．はじめに

本研究は、日本基督教団小田原十字町教会にかかわる満洲引揚者が、満洲での経験をどのように記憶し、語っていたのかを明らかにしようとするものである。小田原十字町教会は一八九七年に小田原日本基督教同胞教会として創立され、一二四年の歴史を有する（写真1）。小田原城（神奈川県）近くの国道一号线に面しており、現在は馬場康夫牧師が教会を導いている¹⁾。教会員は一二五名である²⁾。

これまで満洲引揚者の記憶に関する研究では、次のような指摘がなされている。加藤聖文は、満洲の記憶は戦後の日本政府が満洲の歴史を「公的な歴史」とは認識せず、人びとの「植民地体験の忘却」から始まったことを指摘している³⁾。山本有造は、満洲という「外地」をめぐる公的な忌避と私的な郷愁のせめぎ合いは、戦後日本社会に生きた『引揚者』の心のなかに、表現しにくい『わだかまり』となって残されてきた⁴⁾とし、その『わ

1 満洲引揚者による戦前の記憶と語り——日本基督教団小田原十字町教会に着目して

「だかまり」に正面から向き合うことは、戦後史に残された重要な課題」であると述べている。⁽⁴⁾ 坂部晶子は、「満洲」という植民地の経験は多層的な人びとの記憶の語りによって構成されていることを指摘し、その「多声的な記憶の語り」が織りなしている植民地経験の言説空間を理解することなしには、植民地の当事者たちの、複雑で屈曲した語りはとらえきれない」と指摘している。⁽⁵⁾ また、佐藤量・菅野智博・湯川真樹江編著による「満洲の記憶」研究会の論集では、満洲引揚団体の会報という「言説空間」に着目し、そこで当事者同士がどのような語りをし、記憶を選択してきたのかを明らかにしている。すなわち同論集では、団体によって記憶のかたちによってそれぞれ特色（恩給請願運動や記念誌編纂などの活動）がみられること、満洲引揚者たちが日本社会が満洲を忘却していくことと対し、「抵抗」を示してきたことに光をあてている。⁽⁶⁾

現在、引揚に関する展示などでは一般的に、引揚者には「苦難、貧困」といったイメージが定着している。「平和祈念展示資料館」（総務省委託）の展示やトークイベントでは、兵士や強制抑留者の苦難ならびに引揚者の困難な状況が示されてきているほか、安岡健一や飯田歴史研究所などの研究においても、多くの引揚者たちが帰国後にも渡満前の生活に戻ることはできず、再建の苦勞を余儀なくされた点が述べられている。⁽⁸⁾ これらの研究のように、満洲引揚者の再定着について検討することは、彼・彼女たちの戦後の生活実態を明らかにする上でも重要である。

以上のように満洲に関する記憶の分析は、引揚者、引揚団体、引揚後の生活状況など様々な角度からアプローチがされてきたものの、引揚者が戦後日本社会を生きていくうえで、さまざまなネットワークがどのような役割を果たしたのかについては、いまだ研究の余地がある。満洲には一定数のキリスト教徒がいたにもかかわらず、彼・彼女たちの経験は引揚げ団体や企業などの集団の記憶に埋もれて、その実態がよくわかっていなかった。そのた

め本論文では、個々の満洲引揚キリスト教徒たちが如何に戦後日本社会に定着し、満洲の記憶を語っていたのかを明らかにする。それは満洲引揚キリスト教徒が教会内外の異なる言説空間において、どのように対応していたのかを検討していくことでもある。

本論に入る前に、本テーマに関連する日本植民地キリスト教研究について整理しておきたい。日本植民地キリスト教研究の分野では、布教活動の加害の有無について問うものが多く、議論はその実態を明らかにするものが主流である。土屋昭夫は、戦前植民地の教会は日本政府の恩恵を受けている日本人の教会であったために、植民地統治を推進し「奉仕する集団になりかねなかった」ことを指摘している。⁽⁹⁾ それに対し川俣茂は、盧溝橋事件以降に「社会体制自体が変質していった結果、教会も政治体制に組み込まれていき、教会も変質していかざるをえなかった」と指摘している⁽¹⁰⁾。そのため、日本人の教会が植民地の支配にからめとられていく様相は、「現象的にはあったかもしれない」が「教会員の意識にはなかった」と反論をする。⁽¹¹⁾

また日本人犠牲者が多く出た植民地外での宣教も、近年注目されている。熱河宣教は、ロマンがあり、加害性とは距離を置いたものとして捉えられていたが、この宣教でも植民地機構のネットワークや政府の資金が利用されてきたことが指摘され、「無垢」なものではなかったと述べられている。渡辺などは、熱河宣教者たちが当時の苦難の体験を「試練として受容して被害とはしなかった」と捉えていたことを問題視しており、被害者の不在という点から、伝道者の「伝道至上主義」を批判している。⁽¹²⁾

また天皇制国家体制と植民地伝道については、中濃教篤が次のように述べている。中濃は、『伝道』とか『布教』とかは政治を超越したものなるが故に、すべて『聖』であり、『善』であると思いがちであるが、個人の主観と客観的役割とが合致しないことは意外に多い」と述べる。⁽¹³⁾ この指摘は、当時の社会状況と伝道の実態を考

察する上で非常に重要である。

その一方で、中国側の研究は日本側の宗教政策を批判する内容となっているのが大部分である。徐炳三は「満洲国」(以下、括弧を省略)の宗教制度が現地の人々の弾圧に利用されたことを述べており、その研究は被害の実態を知るのに大変有用ではあるものの、在満日本人キリスト教徒や教会運営にかかわった現地の人びとの内面にまで十分に言及されていない。⁽¹⁴⁾

大東亜共栄圏でのキリスト教徒の活動内容については、松谷曄介の研究が詳しい。彼は中国占領統治における日本の宗教政策は、「一方ではそこにかかわる人物に対して一定の圧力をかけるものでありながら、他方では画一的に個々の人物を統制できるほどの強制力を持つものではなく、彼らの自己裁量の余地を残す」という両面性を有するものであったと指摘している。⁽¹⁵⁾

このように植民地内外における海外宣教について、組織や個人による被害と加害の問題が重点的に検討されてきた。こうしたなかで原誠は、日本のキリスト教における「罪」の認識について興味深い指摘をしている。原は、そもそも日本においてキリスト教に入信する過程が、「家族や共同体からの訣別をも覚悟せざるを得ない事柄」であったために「個人の決断を伴う」入信であったこと、そのために「罪」を垂直的な神との関係としては理解しても、隣人へと広がるという意味における関係概念としては認識していなかった⁽¹⁶⁾ことを指摘している。隣人、すなわち地域や血縁関係を維持したまま、無自覚に集団加入する人びとは異なっていたのが、キリスト教徒の特徴であったのだろう。原は日本のキリスト教徒が「罪」を隣人との関係の中で問うていく意識が脆弱であった⁽¹⁷⁾ことを指摘しており、その特徴は植民地における宣教活動の意味を考える上で重要である。

これらの先行研究のように、植民地での宣教活動はそれ自体が政治性を帯びていたこともあり、関係者は戦後、

旧植民地への謝罪運動に対して無関係ではいらなかった。彼・彼女たちは教会内外において公式であれ非公式であれ、何らかの対応をすることが求められていたのである。

本論文では、日本基督教団小田原十字町教会を対象としている。その理由は、この教会に日本基督教会の満洲中会会計であった佐藤英雄や、南満洲鉄道株式会社（以下、満鉄）最後の総裁であった山崎元幹、日本組合基督教会奉天教会教師であった渡部守成とその令嬢・篠原操子など、当時満洲において重要な役割を有していた人びとが自然に集まっていたことが挙げられる。また、筆者が小田原十字町教会の関係者から満洲の話をつかがい、資料を見せていただいたことも大きい。教会の沿革資料や満洲経験者の追悼集は特に、コミュニティーにおける価値観やそのネットワークが示されており、彼・彼女たちの戦後を理解する上で好古の資料である。¹⁸これらの資料には二つの特徴が指摘できる。一つはキリスト教徒たちが残してきた記録には、主イエス・キリストの「導き」といった語りがよくみられ、他の満洲引揚者の記憶の仕方とは異なっていることである。もう一つは、追悼集で寄稿する者と故人との関係は、毎週日曜日ごとに集まり挨拶をする関係であったことから、無理に人とのつながりを強調するようなものではなく、日常的な関係性のなかから静かに語られたものが多いことである。それは、満洲引揚団体が年に一〜二度大会において集まり、関係性を強調したり、高揚した語り（「開拓精神を發揮」など）が多かったのとは対照的である。果たして満洲経験を有するキリスト教徒たちは戦後、教会内外で満洲の経験をどのように記憶し、語ってきたのだろうか。また、受け入れ側となつた小田原十字町教会の人びとはどのように反応したのだろうか。

結論を先に述べると、満洲経験を有するキリスト教徒たちは、小田原十字町教会で温かく受け入れられたものの、一九六七年の「戦争責任告白」以降は、教団・教区・教会における変化をうけて、その語りやふるまいにも

変化が現れていた。彼・彼女たちは聖書の「天の宝」のたとえをもとに、戦前と戦後における社会の変化を理解しており、その語りは教会や聞き手の状況を考慮するものであった。つまり、教会内外での言説空間による「語り」の内容は、聞き手の信仰の有無や程度にも影響していたのであり、当事者たちの思いは祈りや寄付行為によっても表出されていたことが特徴である。

二・日本基督教会および日本基督教団の活動とその影響

まず日本基督教会についての概要を述べたい。日本基督教会の前身は日本基督公会および日本基督一致教会で、一八九〇年に教会憲法を改正し、日本基督教会と改称した。

満洲では、日露戦争後に南満洲鉄道を獲得したことを契機に、多くの日本人が移住をした。当時大連には一つも日本人の教会がなかったために、一九〇五年に超教派の西広場教会が設立された。西広場教会の設立に関わった人物は日疋信亮で、彼は日清・日露戦争に従軍した軍人かつ伝道熱心な人物であった。軍隊にキリスト教徒が集まり、日々の礼拝が行われるようになったという。⁽¹⁹⁾ 初代牧師は三好務（一九三六年に三吉と改姓）で、一九〇七年に招聘され、その後満洲で一六年牧会した。⁽²⁰⁾ 後述する白井慶吉もまた、西広場教会の牧師を引き継いでいた。西広場教会の信徒数は三七六名（一九二〇年時点）であった。⁽²¹⁾

一九一二年には日本基督教会によって、教会区域の一つである満洲中会の設置が決定された。日本基督教会の中会は一九三九年の時点で東京、浪速、東北、鎮西、山陽、北海道、台湾、満洲、朝鮮、奥羽の一〇中会にわかれていた。この中会の区分、特に満洲中会の範囲は当時の政治的区分に従ったものではなく、「あくまでも現実的・

地理的条件に従った」ものであったとされる。⁽²²⁾ 満洲華北地域では天津、大連、奉天、旅順、撫順、安東、青島、新京、沙河口、嶺前（大連）、鞍山の一一教会で、陪餐員は二五〇〇人程度であった。⁽²³⁾ 教会は主に満鉄沿線の重要都市に設立されていた。

一方、一九三三年には日疋信亮などの有志によって満洲伝道会が結成され、奉天満洲教会、新京満洲基督教会、大連満洲基督教会が設立された。⁽²⁴⁾ 満洲伝道会は現地語によって現地人に福音を伝えることを目的としていた。

一九四一年に日本における宗教団体法の成立を受け、日本基督教会は国内その他の教会と合同し、日本基督教団が成立した。日本基督教会は最大教派として第一部を形成した。第一部の教会・伝道所数は五四五か所であった。⁽²⁵⁾ 日本基督教団は統理者制を採用し、教義の裁定、教団規則の変更、教会の存否、教師の任免、教会人事に決定的な権利を統理者に付与した。⁽²⁶⁾ この時統理に就任したのが、日本基督教会の代表者であった富田満である。統理は高級官僚である勅任官として任用され、日本基督教団は「法的にも政治的にも国家権力のもとに置かれた統制機構」であった。⁽²⁷⁾

一九四一年に渡部守成が所属する日本組合基督教会も、日本基督教団第三部に合流した。渡部は朝鮮平壤での牧会の後、一九一九年より奉天大広場教会にて牧会しており、⁽²⁸⁾ 当時は満鉄関係者や満洲医科大学の医者、教師などが礼拝に参加していた。⁽²⁹⁾ 渡部は満洲伝道会の活動にも協力しており、中国人伝道を目指す大陸伝道者の現地教育を引き受けていたという。⁽³⁰⁾

満洲伝道会は東亜伝道会への改称を経て、一九四三年に日本基督教団東亜局に吸収され、「大東亜」の諸教会との交流、宣撫工作、満洲開拓などの「公益事業」を行った。⁽³¹⁾ 教団は東亜局を重要視し、多くの予算を充てており、賀川豊彦ら著名な牧師の派遣などを行っていた。⁽³²⁾⁽³³⁾

戦況の厳しくなってきた一九四四年後半には、『日本基督教団より大東亜共栄圏に在る基督教徒に送る書翰』が各地の教会に送られた。この書翰は教団が文章の募集を募り、入選した作品をもとに作成されたものである。書翰の記述からは、教団が太平洋戦争と宣教についてどのように考えていたのかを知ることができる。⁽³⁴⁾

日本はこの敵性国家群の不正義に対して凡ゆる平和的手段に出でたるに拘らず、彼らの傲慢は遂に之を容れず、日本は自存自衛の必要上敢然と干戈を取つて立つた。……彼らの不正と不義から東亜諸民族が解放されることは神の聖なる意思である。⁽³⁵⁾

また、教団は天皇と国民の関係について次のように述べている。

抑々我が日本帝国は、萬世一系の天皇これを統治し給ひ、国民は皇室を宗家と仰ぎ、天皇は国民を顧み給ふこと親の子におけるが如き慈愛を以てし給ひ、国民は忠孝一本の高遠なる道徳に生き、この国柄を遠き祖先より末々の子孫に伝えつゝある一大家族国家である。⁽³⁶⁾

このように、教団では太平洋戦争が神の意思によるものとして受け止められており、「大東亜の伝統と歴史と民族性とに即した『大東亜の基督教』が樹立さるべき」と考えられていた。⁽³⁷⁾ 植民地では国民儀礼として、さらに、神社や天皇への礼拝を教会関係者に強要し、「天皇崇拜に帰一させる」ことを目指していた。⁽³⁸⁾ また、日本基督教団は軍用機献納運動を行い、満洲基督教開拓団を送出していた。⁽³⁹⁾ この時期の教団の活動について先行研究では、

教団は戦時下の反キリスト的風潮のなかで、自己防衛や自己保存を求めて成立したという見解が定着している。⁽⁴⁰⁾

次に日本基督教団の敗戦後の歩みについて概観したい。富田満総理は、戦後に教団の責任者として戦争責任を取ることはなかった。彼は、「統理者としての職責を尽くす方が大切であると判断」し、その他の教団指導者も辞任をすることがなかった。⁽⁴¹⁾ 戦時中に戦争推進のために結成された教団の「戦時報国会」は、戦後に「戦後対策委員会」と改称した。⁽⁴²⁾ 富田満は、戦時中は文部省に要求されるまま動いたという認識をもっており、戦後も政府の方針に従った。植民地の人びとに自主的に加害を行ったと省みることはなかったのである。

敗戦後に宗教団体が廃止され、各教派の立場、事情の違いが表面化し、教団からの離脱が相次いだ。⁽⁴³⁾ 日本基督教団はこの危機を乗り越えるために、一九四八年に「機構改革委員会」を組織し、日本基督教団の民主化、中央組織の簡素化、そして教区権限の強化を目指した。⁽⁴⁴⁾ この改革によって、東京教区神奈川分区が誕生した。

敗戦後はアメリカの影響により、キリスト教ブームが到来し、北米からの資金援助を得るなど、教会関係者も信徒の獲得に期待をした。教団は「新日本建設」のためとして当時の風潮に便乗し、「キリスト教の有効性をとく機会主義的いき方、それによって自己の保身と拡大を図ろうとするエゴイズムは、戦前、戦中と少しも変わらなかった」という。⁽⁴⁵⁾ しかしながらブームは思うように続かず、一九六〇年代初めは、「五〇年代の伝道の反省と宣教基本方策」の再考に直面し、教団は信徒を増やすためには「社会や経済の諸問題と取り組まざるを得ないとを知」った。⁽⁴⁶⁾

一九六〇年代には教団としての社会的政治的発言がなされるようになり、戦前の活動に関わっていない若い世代がアジア諸国との交流を再開し、平和友好運動を主導していた。この頃、旧指導陣であった富田満（元総理）は一九六一年に逝去し、小崎道雄（元出版局長、東亜局長）や白井慶吉（元大連西広場教会牧師・日本基督教団

総会議長)などは既に引退をしていた。

戦前の指導陣が退いていたこと、若い世代が教団を導いていたことは、戦後対応の変化をもたらした。一九六七年に出されたのが、鈴木正久教団議長による「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」(いわゆる「戦争責任告白」)であった。この告白では、かつて「教団の名において、あの戦争を是認し、支持し、その勝利のために祈り努めることを、内外にむかつて声明いたしました」と述べ、「世界の、ことにアジアの諸国、そこにある教会と兄弟姉妹、またわが国の同胞にここからゆめしを請う次第であります」と謝罪の意が示された。⁽⁴⁷⁾この告白は韓国や台湾等アジア諸教会からの賛辞をえたものの、旧指導陣は大いに反発をした。そのため、議論は日本全国の各教区や諸教会にも波及した。

この「告白」に対する教団の活動に対し、小田原十字町教会が属した神奈川教区⁽⁴⁸⁾はどのように対応してきたのか、その様子は以下の基本方針から垣間みられる。

「教団信仰告白の受けとめ方」「戦争責任告白の位置づけ」「教会会議のあり方」など、今日根本的対立を含む真理問題についての意見を、互いに誠実につき合わせながら、対話を重ね、真実の教会的交わりの場を作りつつ、⁽⁴⁹⁾「一つの教会を目指すことを、当面の教区形成の基本方針とする」⁽⁴⁸⁾。

このように神奈川教区では、「戦争責任告白の位置づけ」などによる「根本的対立」があったことなどを踏まえ、「一つの教会」を目指した教区形成に取り組んでいたことが確認できる。一九六七年の日本基督教団による「戦争責任告白」は、神奈川教区でも意見の対立を引き起こし、後述するように小田原十字町教会でも、信仰のあり

方について議論が起きていたのである。

三、小田原十字町教会の活動と引揚者の満洲記憶

本章では、小田原十字町教会での活動と引揚者の満洲記憶について検討する。前述のとおり、教会は一八九七年に小田原日本基督同胞教会として創立し、一九四一年に日本基督教団第三部に所属し、日本基督教団小田原十字町教会と改称した。初代牧師は武田頼夫であった。設立時から現在の教会位置に留まるまでは、小田原市内を転々としており、歴代の牧師の交替も短期間で行われていた。それには、城下町小田原というキリスト教に対する理解が浅い土地柄も影響していた。教会沿革資料をみると、宮内俊三牧師（第一代）以降の動向が詳しく記されていることから、その頃から教会活動は深みを帯びてきたようである。『小田原十字町教会百年史』をみると、戦時中の様子について次のように書かれている。「日本基督教団からの国民儀礼実施の強い通達や、軍用機献納献金を要請があつたにもかかわらず、小田原十字町教会では、戦争に協力するような軍用機献納献金に応じることが拒否し、国民儀礼も一切することはなく、主の日の礼拝を重んじる姿勢を毅然として貫いて⁽⁵¹⁾いた。教会では戦争中も細々ながら、日曜日の礼拝は一回も休むことなく、時には外から三人や五人の出席者ながら集まりを続けていたという⁽⁵²⁾。小田原十字町教会がごく小規模な教会であつたこともあり、植民地への派遣自体には殆ど関わっていない⁽⁵³⁾。」

このような教会であつたが、戦後は満洲引揚者が自然と集まってきていた。礼拝には佐藤英雄、山崎元幹、渡部守成とその令嬢である篠原操子などが参加した⁽⁵⁴⁾。

まずは満洲中会の会計を担当していた佐藤英雄についてみていきたい。佐藤は一九一五年に、西広場教会で三好務初代牧師より受洗した⁽⁵³⁾。彼は大連近郊に「東亜合金公司」を経営しており、また満洲中会の会計や沙河口教会の長老としても教会活動に従事していた。満洲国の崩壊後は、中国共産党によって資産を接収され、佐藤も留用された。戦前、彼は「大連に住宅、工場、墓地迄も設け、大連に骨を埋める積り」であったが、一九四七年に引揚げ、親類を頼って小田原に定住、一九四九年に小田原十字町教会に転入会をした。それから約一三年間、小田原十字町教会の長老として活動した。佐藤は一九六二年に逝去し、その後に教会において「故佐藤英雄長老一〇〇日記念礼拝」がもたれた。また関係者によって、追悼集『鉄の独語』（佐藤英雄著、佐藤もと編、私家版、一九六三年）が刊行された。佐藤は生前、満洲での敗戦生活を次のように振り返っていた。

終戦を迎えて其の烈しき試練を受けるに及んで薄信乍ら信仰の尊さ有難さをしみじみ味わわれました。有史以来初めて敗戦という憂き目を而も敵国内で味わされた丈に日本民族の受けた「ショック」はそれ丈に大きい。一夜にしてソ聯、中共の支配下に変り、吾等の為政者は凡て何所にか拉致され、人皆只ぼうぜんたる有様、敗戦につきもののソ聯兵の難、暴民の難、略奪の難に耐えかねて自殺、一家心中、集団自殺等満洲至る所目をおおう悲劇は繰り広げられた何たる悲惨事でしょう。此の時程神の御言が切実に感じられ伝道の大いな事を痛感した事はありませんでした。⁽⁵⁵⁾

佐藤は敗戦後の困難において、この時ほど「伝道の大切な事を痛感」したことはなかったという。彼が満洲での経験を、伝道につなげて理解していることが特徴的である。

この追悼集には、満洲時代の教会関係者のものが多く、そこから佐藤に対する評価を知ることが可能である。白井慶吉は、後に「戦争責任告白」に憂慮の意を示した人物である。⁽⁵⁶⁾ 白井は次のように自己紹介をし、佐藤を振り返る。

筆者は大連教会牧師として任期二〇年になり、その間旧日基の中会及び教団満洲教区の総会議長に選ばれること一七年を数えた。筆者は中会のち教区のためには、同志とともに常に積極主義を堅持して企画及び実行に当った。諸方から注目をあびたあの進んでやまない宣教の発展ぶりは、中会のち教区が堅持し続けた積極主義の勝利であった。この勝利のかけには佐藤長老の財的貢献が有力に物語っていたのである。君は永い年月にわたって中会のち教区の財務を担当し、筆者とは影の形にそうように大陸の宣教に参与した。⁽⁵⁷⁾

このように白井は、かつての満洲で「積極主義」を堅持し、それを財政的に支えていたのが佐藤であったと評価していた。この記述は、教団が「戦争責任告白」を出す以前のものである。このほか、戦前に日本基督教会奉天教会牧師を務めた林三喜雄は、次のように述べている。⁽⁵⁸⁾

御主人は実に教会のため、満洲中会のために積極的な御方でした。……それにともなつて日本基督教会満洲中会の伝道戦線も拡大してゆきましたが、こういう活潑な動きに平信徒として、常に参加し、協力をおしまなかつたのは御主人でした。⁽⁵⁹⁾

このように、佐藤が満洲中会や教会活動に協力を惜しまなかったことを述べ、白井と同様にその積極性を評価していた。また、西広場教会初代牧師であった三好務も追悼文を寄せている。三好は、佐藤を「神のみ名の為に身を惜しまず、身をもって、又物をもって奉仕することを喜びとした、忠且つ善なる僕であったと思います」と述べ、佐藤が熱心に神に奉仕していたことを評価していた。

一方で、小田原十字町教会の側ではどのように佐藤をとらえていたのであろうか。佐藤が教会長老であった時に教会を導いていた宮内俊三牧師は、次のように述べている。

このような中であつて続いた同家（佐藤一家——引用者注）の嚴重な信仰生活は十字町教会に新らしい活力を与えました。創立の時が古いばかりで、実際にはほとんど戦後の教会と言つてもよいこの教会は万事不備でありましたが、一步一步と、礼拝、伝道、会計と整備されたのは同長老に負うところが実に多かつたのです。⁽⁶¹⁾

佐藤は戦後、満洲中会の会計の経験を活かしながら、小田原十字町教会で長老としての務めを果たしていた。さらに宮内牧師は戦前の活動をつぎのように捉えていた。

長老が満洲に生涯をかけた事業も、どうなったことでしょうか。奉仕をされた同地の教会も今はありません。しかし、地上の形あるもの一つとして消え去らぬものはないことはわれわれの承知のことです。しかし主のためにした目に見えぬ信仰の深い奉仕は永遠に、神に覚えられ、また聖い信仰的人格は、接する人の

心に永く残ります。⁽⁶²⁾

このように佐藤の満洲宣教の経験は評価され、戦後日本の教会で活躍する土台となっていたことが確認できる。彼らは戦前の活動を「地上」の滅ぶものとして理解し、「目に見えぬ信仰の深い奉仕」は永遠に残るものとして、分けて考えていたのである。

宮内牧師の後を継いだ藤原亮牧師は、青少年期に奉天にいた人物である。藤原牧師は次のように振り返っていた。

着任してみると、大連西広場教会で育てられ、沙河口教会の長老、大連中会の会計であった佐藤英雄長老……というような名長老がたがおり、まことに壯觀でありました。⁽⁶³⁾

満洲を実際に知っていた藤原牧師も、佐藤が満洲で役職に就いていたことを評価していた。教会コミュニティのなかでは、満洲経験者もそうでない者も、戦前の高い職位を評価し、尊敬していたことがわかる。

小田原十字町教会で行われた「故佐藤英雄長老一〇〇日記念礼拝」（一九六三年三月二十七日）では、次のような弔辞がなされていた。そこから教会全体として、彼をどのようにとらえていたのかが確認できる。

あなたはあなたの御生涯の大半を費して心血を注がれた満洲大陸に於ける御事業も過ぐる大戦によって全く水泡に帰し、物質的には大きな打撃を蒙りましたが其の間にあなたの胸に蒔かれたクリスト者としての信仰の種はあなたという良き地を得てそこに発芽し成長し戦後満洲より御引揚げ後、あなたにとって縁りの地

である此の小田原に余生を送られる様に定められてからは我が十字町教会の会員としてそして遂に長老職の一人として且つあなたご自身のみならず御家族共々全身全霊を教会の御用に御献げになりました。此度あなたが神の御許に召されて天の父にまみゆる時必ずや忠且つ善なる僕なりしよとの御ほめの御言葉を賜って居るものと確信して居ります。⁽⁶⁴⁾

このように、牧師たちは佐藤英雄の満洲経験をまるごと評価し、彼を教会全体として受け入れていたことがわかる。佐藤もまた、満洲での教会活動経験を活かし、小田原十字町教会の運営に貢献していたのである。

次に、渡部守成とその令嬢・篠原操子についてみていきたい。渡部父娘の戦後を理解するには、特に一九六七年の「戦争責任告白」が出された頃の小田原十字町教会の様子を合わせてみていく必要がある。馬場牧師によると、当時は「戦責路線派／社会派VS福音派・教会派が主導権争いを続け、教区によってかなり色彩が違」っており、「神奈川県は社会派と呼ばれる牧師・教会が多い教区」であったという。馬場牧師は、戦責路線派／社会派について「主イエス・キリストの十字架の死と復活を信じる信仰による贖罪、終末的な救いを宣べ伝えるというよりは、唯物論的な救い、あらゆる抑圧、差別の撤廃を声高に叫ぶ傾向」があり、政治活動への参加が積極的であったと説明する。⁽⁶⁵⁾

当時教会を導いていた藤原牧師は、青年会を導く立場として政治問題に積極的に関わることを是としていたが、⁽⁶⁶⁾のちに政治的立場を主張することを控える立場をとるようになっていた。⁽⁶⁷⁾その理由の一つは、当時青年会が礼拝を守らないで社会の動きに反応して活動する様子があったために、長老会が信仰上の危機感を強くしたか

らであった。⁽⁶⁸⁾一九六八年二月に、教会の青年会は近隣の教会とともに「第二次大戦下における教団の罪の告白」についての懇談会を開催し、長老会等に「戦争責任告白」に対する考えを求めていた。⁽⁷⁰⁾教会長老であった篠原操子は回答書を提出し、日本組合基督教会奉天教会教師であった父・渡部守成の活動について、次のように説明した。⁽⁷²⁾

（満洲においては——引用者注）私自身、牧師の家庭に育ち信仰の必要性も重要性もそれ程感じることなくぬくぬくと育つてきました。けれども、あの戦争において現地における牧師として、いかに困難があったかと言うことを私は父を通じて話させていただきました。……戦争が中端になって来た頃、教会にも礼拝や祈禱会が持ちがなくなり、特高の人が礼拝の席に坐っていたり、牧師の中には（ホーリネス派）ろうごく（牢獄——引用者注）に入れられる人も出てきました。でもその中にあっても、私共の教会（日本組合基督教会奉天教会）は休むことなく礼拝をつづけ又、市にある教会が教派を別にかすることなく平和のための早天祈禱会と特高の目をくらすために、もち廻りの様場所をかえて寒い寒い冬の日にも行われ参加したのをおぼえております。又私たちの牧師館に特高や憲兵が来て、父に直接談判で「天皇陛下とキリストとどっちがえらいのか、答えろ」と言つて何度も来ました。そのたび、家族の者はハラハラして、成りゆきを心配しておりましたが、父は気長に相手に話をして、キリスト教を導き入れるが如くの態度でえんえんと話をし、食事までいっしょにしたこともありました。

敗戦時の混乱については、次のように説明する。

今度はロシア兵、中共、国府軍と入れかわり立ちかわり来て、なかには、にせ者の中共軍や国府軍まできて「兵隊なら銃を持っているだろう、銃を出せ、出せ」と言われ何度か父もつれさられそうになったかわからないそうです。

そして、次のように満洲時代を追想する。

でもそのたび不思議にも神様の守りのうちに父も、一度もいたためつけられることなく、連れさられる事もなく全く不思議のようです。今いろいろと思う時、父の信仰生涯は戦中、戦後を通して、強い信仰を守り、周囲の人のため神のあかし人として、愛の奉仕を一貫して来たと感じいたします。

彼女は文書において父の苦勞をねぎらい、おわりに「広く社会、世界に通じる信仰者」になることを望んでいた。文書では、祈りによる沈黙を示唆しており、この点は「戦争責任告白」に対する青年会と長老会の意見の違いを包摂するものとして興味深い。長老会では、青年会が礼拝を守り、祈りを中心とした信仰に戻ることが望んでいたのである。その後も青年会は、教科書問題や靖国神社問題などに取り組んできたが、一九六九年には「教会につらなる枝」、つまり教会を構成する一員であることを重視して解散した。⁽⁷⁸⁾

次に山崎元幹について紹介したい。山崎は一八八九年に福岡県に生まれ、東京帝国大学法科大学政治学科を卒業し、満鉄に入社した。一九四五年に満鉄総裁に就任したが、四か月後の九月にGHQにより解任させられた。

戦後処理の後、一九四七年に中国長春を去り、一〇月に小田原に到着をした。一九五四年には満鉄会会長に就任している。満洲では言わずと知れた大人物であり、旧満鉄社員からも敗戦後の困難を共に乗り切った人物として絶大な支持を得ていた。山崎は小田原十字町教会で一九六三年一月一日に受洗し、一九七一年一月二四日に逝去した。⁽⁷⁴⁾

山崎がなぜ小田原に居を構えたのかは明らかとなっていないが、戦前小田原は御用邸や閑院宮別邸、伊藤博文の別荘が置かれるなど、著名人の休養地として注目されていた。山崎は小田原の風光明媚な点を高く評価していたようである。⁽⁷⁵⁾ 満鉄会編『満鉄最後の総裁 山崎元幹』からは、山崎がかつてキリスト教をどのように捉えていたのかが確認できる。それによると山崎は「在満邦人は国際人たる修養を要す」るために、「満洲人との宗教上の連鎖はキリスト教徒に依るを要す」ること、また「神仏教は満洲国に入るべからず、国際的たり得ざるべし」と考えていた。これについて、本の編者は「峻烈なことをいつてのけた」ものの「国際政治感覚を通じたキリスト教観というべき」であると評価している。⁽⁷⁶⁾ 山崎が入信したのは、中村繁次（旧満洲電業社員、戦後は溝ノ口教会牧師）⁽⁷⁷⁾との交流が大きなきっかけであった。⁽⁷⁸⁾ 小田原十字町教会の礼拝に参加するようになったのは、中村牧師が藤原亮牧師と佐藤英雄長老を紹介したからである。⁽⁷⁹⁾ その後、時々教会に出席し、夫人の逝去一三日後に受洗した。⁽⁸⁰⁾

ただ残念なことに、小田原十字町教会での「戦争責任告白」議論に対する山崎の反応は殆どわかっておらず、その実態把握は困難である。青年会会長であった露木賢一長老によると、当時、山崎元幹の名前は耳にする程度で、彼が満鉄総裁であったことは葬儀の時をはじめ知ったという。また、その後も山崎のことが話題に上がることはなかったと回想する。⁽⁸¹⁾ 山崎の葬儀は、藤原牧師が司式を務め、「勝利の人生」という題目にて説教がなさ

れた。⁽⁸²⁾その後、満鉄会主体で告別式が行われ、溝ノ口教会と小田原十字町教会には、山崎の遺言に基づき「巨額の遺産分配」が行われた。⁽⁸⁴⁾現在、教会には山崎元幹の献金記録や、山崎が長老たちと共に自宅前で写っている写真などが保管され、生前に教会長老との交流があったことが僅かに確認できる。⁽⁸⁵⁾しかしながら教会資料に発言内容が殆ど残されていないのは、彼が一般信徒として教会に通い、控えめに活動していたからと思われる。それは、満鉄総裁としての山崎の言動が、満鉄関係資料や追悼集などからある程度知ることができることは対照的である。⁽⁸⁶⁾

なお、小田原十字町教会は一九六六年前後より教会墓地の購入を断続的に議論しており、富士霊園が候補に挙がっていた。⁽⁸⁷⁾富士霊園には一九八二年に満鉄留魂碑が設置され、敷地にも満鉄関係者が多く眠っているが、そのすぐ隣に小田原十字町教会墓地が建設（二〇〇〇年）されたことは興味深い。ただし、山崎の遺骨は本籍地（福岡県糸島郡）の納骨堂に納められている。⁽⁸⁸⁾

四．教会外での活動と「天の宝」

前述の篠原操子は、満洲時代に満洲国立公主嶺農事試験場の技術者、篠原寛と結婚していた。彼女は長春近郊の街である公主嶺で敗戦を経験し、引揚げ後は渡部守成牧師夫妻と共に、小田原十字町教会の日本間に数年間居住した。⁽⁹⁰⁾彼女は一九九〇年代、教会活動のほかに、旧満洲国立公主嶺農事試験場技術者とその家族の団体である「公農試会」にも参加し、その会報上でも満洲の記憶をとどめていた。次に紹介する内容は、非キリスト教徒も読む会報上での語りである。文章は当時をしのぶ文脈で語られている。

あれから四〇数年経ちますが、いろいろな困難にぶつつかりました。が、どんな時にでも私共敗戦後のどん底生活が無かったとしたら、その困難に負けてしまったことだろうに、と思われるような事が何度もあります。……敗戦のあの困難に打ち勝った強い精神力を土台とし、バネとして、残る余生を送って行きたいと考えています。外地での敗戦はみじめそのものでしたが、弱い者を助ける愛の心と、艱難に打ち勝つ強い力の二つを私共に与えて下さったことは誠に有難く幸せなことと思っているこの頃です。⁽⁹¹⁾

このように敗戦後の苦労を語る内容は、引揚団体の会報上では頻繁にみられるが、「愛の心」と「強い力」のようなキリスト教を彷彿とさせる言葉を盛り込むのは、篠原などキリスト教徒の特徴であろう。ただし、ここではその「源」については触れられておらず、非信徒への「配慮」が込められていたものとみられる。

また同じ会報において、篠原は日常の生活を紹介するかたちで、キリスト教徒としての信念を示す文章も記していた。⁽⁹²⁾以下は、彼女が敗戦後に満洲で人助けをして、引揚げ後にその人から丁寧な手紙と謝金を受け取ったことについての記録である。

人の心のすさんだ今の世の中に、こんな美しい話があるものかと、私はこのお金を自分達では使っては申し訳ないと思い、教会の墓地献金、神戸の震災で壊れた教会等に献金として出した。キリスト教では「天国に宝を積み」という言葉があり、地上の生活でお金や沢山の宝を積んでも、天災や泥棒、火災にあうとなくなるし、それよりもいい事に使いなさい。それが「天国に宝を積み」ということでしょう。……私共はこの喜びを五十年たつてもう一度味わい、神様が私共に贈り物をしてくれたのだと思いい感謝しています。又天国の

父も喜んでいる事でしょう。⁽⁹³⁾

篠原は、満洲関係者から受け取った謝金を教会の献金として用いていた。教会と関係のない外部での活動も、彼女の信仰のなかに結び付けられていたのである。彼女はキリスト教の教えに従いながら行動しており、これまでの経験はつながりを絶つことなく、お金を用いる先として示されていた。それは彼女なりの満洲経験と信仰の発露であった。

ちなみに、この「天の宝」という表現は、佐藤英雄の回想録にも出てくる。佐藤は次のように語っていた。

引き揚げにさいし種々の物を失ったが、虫もくわずさびもつかず盗人も盗み得ない天の宝、信仰のみは奪われないうで無事小田原に帰り、初めてくぐる小田原十字町教会へ恰も我家へかえった思いで今日迄御厄介になりました事は何より感謝であります。⁽⁹⁴⁾

「天の宝」は聖書の言葉で、このたとえが彼・彼女たちの行動原理になっていたのである。敗戦直後の艱難も、引揚げ以降は「主が与えて下さった」経験として語られており、周囲の教会員もこのたとえを理解し、引揚者やその植民地経験をまるごと受け入れていた。興味深いのは、開拓団民等の人びとは引揚げ後に「金儲けのために行った」「自業自得」といった批判を受けていたのに対し、教会コミュニティーのなかではそうした批判はみられることがなく、むしろ温かく歓迎している点である。

原誠は前述のように、信仰に基づいた「神と個人の垂直の関係性」による内なる認識が、隣人への「罪」への

認識へと広がっていかなかったことを指摘しているが、この「天の宝」の認識もまた、戦前と戦後の変化に影響を及ぼされない「神と個人の垂直の関係性」によるものであったと考えられる。彼・彼女たちは戦前の伝道活動を、「神の国」拡大のために奉仕したと認識し、その経験や感情は「天の宝」として蓄えておくものと捉えていた。それは時代の変化によって他者に糾弾される経験ではなく、あくまでも主のために働いた経験であり、「罪」の裁きはイエス・キリストのみが行うものであった。彼・彼女たちは主イエス・キリストとの一対一の関係性を有していたため、世俗的な「罪」への対応は、日本社会において各々が属するグループによってなされるべきものであったのである。

そのため、植民地宣教活動についての戦後対応もまた、教団の各層で対応がなされていた。それらの特徴は次のとおりである。まずは教団レベルでの対応である。日本基督教団は、敗戦後しばらくの間は戦争責任を認めなかったが、新しい指導者の登場と旧植民地との関係回復もあって、一九六七年に「戦争責任告白」を発表した。教団のスタンスは一八〇度変化していた。つぎに、教区レベルの対応である。「戦争責任告白」以降、神奈川教区では意見の対立などがみられた。そうした情況のなか、「一つの教会」になることを目指していた。最後に、教会レベルの対応である。小田原十字町教会では当初、政治活動に積極的であったが、青年会を中心とした政治活動が過度になりすぎたために、教会では政治団体化を避ける動きがみられた。⁽⁹⁵⁾ 篠原操子長老は青年会を鎮めるために過去への言及を行い、祈りによる沈黙を示唆していた。教団・教区・教会によるそれぞれの対応は、満洲引揚経験を有するキリスト教徒たちにも影響を及ぼしており、彼・彼女たちは慎重な対応が求められていたのである。満洲引揚キリスト教徒たちは聖書の「天の宝」のたとえによって、戦前と戦後の経験を理解しており、その語りは教会や聞き手の状況を考慮するものであった。教会内外での言説空間による「語り」の内容は、聞き

手の信仰の有無や程度にも影響しており、彼・彼女たちの思いは、祈りや寄付行為によっても表出されていたのである。

五・まとめ

本論文では次の点が確認できる。一つ目は、開拓団や一般の引揚者と異なり、満洲経験は教会関係者から温かく受け止められていたこと。二つ目は、「主のために目に見えぬ信仰の深い奉仕は永遠に、神に覚えられ」る(宮内牧師)の言葉にあるように、キリスト教徒は満洲の苦難を「主に与えられた経験／苦勞」として解釈・理解し、その信仰を連続したものと捉えていたこと。三つ目は、教団の戦後の対応は各教区や教会に影響を与えたが、それぞれのレベルで対応に違いが現れていたことである。

教団は信徒を増やすために「戦争責任告白」をし、神奈川教区は積極的に政治的意見の表明や活動を行っていたが、それに対して小田原十字町教会の長老会では、礼拝を守るために政治的な発言を控えるようになっていた。当時、教会長老であった篠原操子は、かつての父の牧者としての活動を評価し、「広く社会、世界に通じる信仰者」になることを望んでいた。政治的な活動に傾倒しつつある青年会に対して、祈りという沈黙を示唆していたのである。この点は、青年会と長老会の意見の違いを包摂するものとして興味深い。彼・彼女たちの満洲記憶は「語られる」ことのみならず、祈り(沈黙)によっても表現されていたのである。

また、佐藤英雄や篠原操子は「天の宝」のたとえをもとに、かつての苦難や経験を受け入れ、戦後の日本社会を生きていた。篠原が教会外で得たお金を教会に献金していたことは、「無関係」な物事が信仰によって結びつ



写真1 旧教会堂

(出典)『小田原十字町教会百年史』
編輯委員会『小田原十字町教会百年史』
1998年、11頁。

けられ、満洲での経験が理解されていたこととして捉えることが可能である。おそらく信仰の程度によって、語りの内容やお金の行き先は異なっていたと思われるが、教会長老を担う信仰者には、こうした行為が満洲経験ならびに信仰の表出先の一つであったとみられる。

なお、山崎元幹は一般信徒として小田原十字町教会の礼拝に参加し、多額の献金もしていたが、かつて満洲での影響がいかに大きかったとしても、教会の発言記録には殆ど残されることがなかった。それは、戦後に満洲で約七八〇頁にもおよぶ追悼集が刊行されたのとは対照的である。発言力の大きさは教会というコミュニティのなかでは、教会活動の積極性によって決められており、関連資料が遺されていない点も、満洲引揚者の語りの場を考える上で留意していく必要がみられるのである。

(1) 馬場康夫牧師は全国連合長老会の書記を二二年間ならびに、神奈川連合長老会の議長を一二年間担っている(二〇二二年時点)。

(2) 一九六三年度の日曜礼拝(朝)には約四六名が参加していた(『小田原十字町教会百年史』編輯委員会『小田原十字町教会百年史』一九九八年、五八五頁)。

(3) 加藤聖文「引揚者をめぐる境界——忘却された大日本帝国」安田常雄編『社会の境界を生きる人々』岩波書店、二〇一五年、一六頁。

(4) 山本有造編『満洲——記憶と歴史』京都大学出版会、二〇〇七年、iv頁。

(5) 坂部晶子『『満洲』経験の社会学——植民地の記憶のかたち』世界思想社、二〇〇八年、一三三二頁。坂部は、「植民地の記憶の語りというのは、植民地という時期をすぎて、その後の時代のなかで、想起され表出される経験のかたち」であり、「こ

こで語られた植民地経験の内容以上に、その経験の語り口そのもののなかに、植民者としての、あるいは被植民者としてのアイデンティティ構成が新たなかたちへと転換されていくさいの、錯綜し屈折したそれぞれの人々の自己のあり方にかんする敬意が示されている」と述べている(同、二二二—二二三頁)。

(6) 佐藤量・菅野智博・湯川真樹江編『戦後日本の満洲記憶』東方書店、二〇二〇年、三五二頁。

(7) 平和祈念展示資料館(総務省委託)ホームページ「当資料館について」<https://www.heiwakinen.go.jp/about/>(二〇二二年八月二七日アクセス)。

(8) 安岡健一『「他者」たちの農業史——在日朝鮮人・疎開者・開拓農民・海外移民』京都大学出版会、二〇一四年。満蒙開拓を語りつぐ会編『下伊那のなかの満洲 聞き書き報告集二』飯田市歴史研究所、二〇〇三年、二七頁など。

- (9) 土肥昭夫「一九三〇年代における日本基督教会の活動(二)」『キリスト教社会問題研究』、一九七五年、一五五頁。
- (10) 川俣茂「一九三〇年代の大連日本基督教会の伝道に関する一考察——大連日本基督教会月報『靈光』を基として——」『神学』、二〇〇三年、一二五頁。
- (11) 同上、二二五頁。
- (12) 渡辺祐子・張宏波・荒井英子「日本のキリスト教と植民地伝道——旧満州『熱河宣教』の語られ方」、明治学院大学国際平和研究所編『PRIME』三二号、二〇一〇年。
- (13) 中濃教篤『天皇制国家と植民地伝道』国書刊行会、一九七六年、二頁。
- (14) 徐炳三「偽滿体制下宗教団体の処境与対応——以基督新教為例」『抗日戦争研究』二〇一一年第二期、五八頁。ほかに、徐炳三「太平洋戦争爆发后伪滿对基督教会的控制」(『史学集刊』二〇一三年一月第六期)や、徐炳三「歴史真相的揭示維度——偽滿基督教史料之案例解読」(『世界宗教研究』二〇一七年第六期)などがある。
- (15) 松谷暉介『日本の中国占領統治と宗教政策——日中キリスト教者の協力と抵抗』明石書店、二〇二〇年、三八三頁。
- (16) 原誠「戦時下の教会の伝道——教勢と入信者」『基督教研究』六三巻、二号、七六頁。
- (17) 同上、七六頁。
- (18) 本論文は『小田原十字町教会百年史』編輯委員会による『小田原十字町教会百年史』(一九九八年)を主に使用している。この百年史の編集方針は次のように定められている。一・一〇〇年の歴史を忠実に記述するものとする。二・資料は現存する教会資料を活用する。三・資料に残されているもの限り、関連の事柄に触れていく。四・会議によって決められた事柄については、一切個人的な働きとしてみない。五・連合長老会の窓から見た小田原十字町教会の一〇〇年史については、現長

老の責任において記述していただく、「教会史編集方針について（案）内部資料」一九九五年八月二六日）。

(19) 韓哲曦『日本の満州支配と満州伝道会』日本基督教団出版局、一九九九年、三五頁。

(20) 大連西広場教会の初代牧師であった三好は、小田原十字町教会で次のように評価されていた。「三吉務先生は、植村正久先生（日本のキリスト教界に於ける大先輩）によって創立された東京・富士見町教会の第三代主任牧師として昭和二年御就任、昭和二二年までその要職にあり、爾後同教会の名譽牧師として現在にいたっています。またそれ以前に大連の教会を牧された老練の牧者であり、今回先生のお話しをおききできることはまさに幸いです」。このように三好は、植村正久牧師から連なる名牧師として知られており、大連での経験は「老練」なるものとして捉えられていた『小田原十字町教会百年史』編輯委員会『小田原十字

町教会百年史』一九九八年、二〇四頁）。

(21) 日本基督教会同盟編『大正八年基督教年鑑』日本基督教会同盟、一九二〇年、九四頁。

(22) 川俣茂「一九三〇年代の大連日本基督教会の伝道に関する一考察——大連日本基督教会月報『靈光』を基として——」『神学』六五号、二〇〇三年、二二四頁。

(23) そのほか、伝道教会は鉄嶺、哈爾濱、吉林、北京、伝道会は錦県、四平街、牡丹江、齊齊哈爾であった。

(24) 韓哲曦『日本の満州支配と満州伝道会』日本基督教団出版局、一九九九年、四〇、五八、五九頁。

(25) 「昭和一六年度統計」、津田正則編『昭和一七年日本基督教団第一部年鑑（旧日本基督教会）』日本基督教団第一部事務所、一九四三年、一七五頁。

(26) 日本基督教団宣教研究所教団史料編纂室『日本基督教団史料集第二編 戦時下の日本基督教団（一九四一〜一九四五年）』日本基督教団宣教研究所、一九九八年、三頁。

- (27) 同上、四頁。
- (28) 遠藤淳子・篠原操子・渡部聰子・池宮恒子『星の
ように——渡部守成牧師小伝』私家版、一九八五
年、二二頁。
- (29) 同上、二七頁。
- (30) 同上、二六頁。
- (31) 土肥昭夫『日本プロテスタントキリスト教史』新
教出版社、一九九四年、三六〇—三六一頁。
- (32) 同上、三六一頁。
- (33) 松谷暉介『日本の中国占領統治と宗教政策——日
中キリスト者の協力と抵抗』明石書店、二〇二〇
年、三三九頁。
- (34) 近年の研究によると、満洲安東教会の牧師は、戦
争でアメリカに勝てないと思っていたことがわか
る。甲賀綏一牧師は渡満前にアメリカで神学を学
んでおり、「日頃考えている如く敗戦の結果となっ
たのは悲しかった」と述べている(甲賀綏一、甲
賀あや「遊牧の雑草」、解題 甲賀真広、編集 甲
賀真広、森巧、梅村卓、大野太幹『満洲の記憶』
六卷、二〇二〇年、六三頁)。
- (35) 日本基督教団『日本基督教団より大東亜共栄
圏に在る基督教徒に送る書翰』日本基督教団、
一九四四年、三頁。
- (36) 同上、八頁。
- (37) 同上、一二頁。
- (38) 大東亜共栄圏における宗教政策について、松谷は
次のように述べる。「宗教を通しての大東亜共栄
圏建設とは、超宗教的公教である神社神道を諸宗
教に受け入れさせ、天皇崇拜に帰一させることを
意味した」(松谷暉介『日本の中国占領統治と宗
教政策——日中キリスト者の協力と抵抗』明石書
店、二〇二〇年、一〇一頁)。
- (39) 日本基督教団宣教研究所教団史料編纂室編『日本
基督教団史資料集第二卷 第二編 戦時下の日本基
督教団(一九四一—一九四五年)』日本基督教団
出版局、一九九八年、二四八—二五〇、三三〇—

三三二頁。

- (40) 日本基督教団宣教研究所教団史料編纂室編『日本基督教団史資料集第一巻第一編 日本基督教団の成立過程（一九三〇～一九四一年）』日本基督教団出版局、一九九七年、八一―九頁（土屋昭夫執筆）、および原誠「日本基督教団とファシズム時代」『基督教研究』六一巻一号、一頁。
- (41) 日本基督教団宣教研究所教団史料編纂室編『日本基督教団史資料集第三巻第二編 日本基督教団の再編（一九四五～一九五四年）』日本基督教団出版局、一九九八年、四一―五頁。
- (42) 同上、四頁。
- (43) 『小田原十字町教会百年史』編輯委員会『小田原十字町教会百年史』一九九八年、一八六頁。
- (44) 同上、一八六頁。
- (45) 土肥昭夫『日本プロテスタントキリスト教史』新出版出版社、一九九四年、四一―七頁。
- (46) 日本基督教団宣教研究所教団史料編纂室編『日本基督教団史資料集第四巻第五編 日本基督教団の形成（一九五四～一九六八年）』日本基督教団出版局、一九九八年、九頁。
- (47) 同上、三三七頁。この告白は、一九四四年に出された前述の『書翰』の復活主日を念頭において発表されたことから、その内容を打ち消す意味がこめられていた（同三三七頁）。
- (48) 一九六四年に神奈川教区の設立が決定した。
- (49) 日本基督教団神奈川教区編『教区だより』二九号、一九七一年、五頁。
- (50) 『小田原十字町教会百年史』編輯委員会『小田原十字町教会百年史』一九九八年、一四二頁。
- (51) 同上、一四二頁。
- (52) ほかに満洲新京教会会員であった石川留吉家族が、小田原十字町教会の礼拝に参加した。
- (53) 佐藤英雄著、佐藤もと編『鉄の独語』私家版、一九六三年、七三頁。
- (54) 戦前、満洲において佐藤が現地人と如何なる関係

にあつたのか、次の文章から知ることができる。「君は満人ばかり使つていて、帰るとき持物の検査もなにもしないようだが、原料などの紛失がないのかね。佐藤君の答は次のようなものでした。

私は満人の従業員を集めて宣言した。『おれは外出も多いし一人でもなにかもやるのだから諸君の監督も出来ない。朝の始業時間も終業の時間もきめてあるから、各自それを守ってもらいたい、又品物を持ち帰ったりすると私も困るが、この仕事に損をするようだと会社もつぶれて君等も困るのだから御互に充分気をつけてそのようなことをしないようにしてもらいたい。私は諸君を信用して、諸君の行動に対してうたがわれない。』と話したそうです。その結果自分の工場に関するかぎり就業時間がよく守られ、品物等の紛失は全くないということでした」(同上、九六頁)。

(55) 同上、五三頁。

(56) 日本基督教団宣教研究所教団史料編纂室編『日本

基督教団史資料集第四卷 第五編 日本基督教団の形成(一九五四―一九六八年)』日本基督教団出版局、一九九八年、三四一頁。

(57) 佐藤英雄著、佐藤もと編『鉄の独語』私家版、一九六三年、六三頁。

(58) 林はかつて満洲事変を起こした日本軍を支持したことがあり、満洲における日本の権益を重視していた。満洲事変の勃発に際し、国内のキリスト教徒であった金井為一郎は「忍耐をもって平和的に解決」すべきと批判していたのに対し、林三喜雄は「事実をよく認識していない」と述べ、日本の軍事的行為を擁護していた。それについて土肥昭夫は「彼があくまで満州を統治した日本人の側に立つてものを考え、その利害のことしか考えなかつたからだ」と指摘する(土肥昭夫「一九三〇年代における日本基督教会の活動(二)」『キリスト教社会問題研究』、一九七五年、一五五頁)。

(59) 佐藤英雄著、佐藤もと編『鉄の独語』私家版、

一九六三年、六六頁。林は当時を「それは私の長い伝道生活の中でも、まことに輝かしい思い出があります」と振り返っている。

(60) 同上、六〇頁。

(61) 同上、七〇頁。

(62) 同上、七一頁。

(63) 『小田原十字町教会百年史』編輯委員会『小田原十字町教会百年史』一九九八年、一七四頁。

(64) 佐藤英雄著、佐藤もと編『鉄の独語』私家版、一九六三年、一〇八頁。

(65) 馬場康夫牧師聞き取り(二〇二二年四月二七日)

(66) 藤原亮「教会と政治活動(前編)」「おとずれ(小田原十字町教会青年会機関誌)」、一九六三年七月、四頁。

(67) 馬場康夫牧師聞き取り(二〇二二年四月二七日)

(68) 『小田原十字町教会百年史』編輯委員会『小田原十字町教会百年史』一九九八年、二三一頁。こうした社会情勢と教団の動静、小田原十字町教会内

部での信仰上の危機は、その後の東海連合長老会加盟へと至る要因の一つとなった。「戦争責任告白」への対応は各個の教会だけでは対応できないことに、「気づきはじめていた」からであるという。

(69) 同上、二三六頁。

(70) 青年会会長福地淳子・企画露木賢一「要望書」一九六九年二月二日、二頁。

(71) 篠原操子「第二次大戦下における教団の罪の告白」を学ぶにあたって」一九六九年二月一六日。

(72) 渡部守成牧師は、一九六〇年四月一五日に神奈川分区分区総会で倒れ、逝去した。彼は、日頃「遺言は何もない。自分の生涯が遺言だ」と言っていたという(遠藤淳子・篠原操子・渡部聰子・池宮恒子『星のように——渡部守成牧師小伝』私家版、一九八五年、五五―五六頁)。

(73) 作成者不明「創立一〇〇周年記念誌資料」作成年不明、三八頁。『小田原十字町教会百年史』編輯委員会による聞き取り資料とみられる。

(74) 馬場康夫牧師聞き取り (二〇二二年四月二七日)

および財団法人満鉄会編『満鉄最後の総裁 山崎元幹』財団法人満鉄会、一九七三年、七四六一―七四七頁。

(75) 同上、二一五―二一六頁(原典は『満蒙』昭和二年八月号)。

(76) 同上、七四四頁。山崎は寛光頭『日本人基督者の眼に映じたる上海及び滿洲事変』(出版社、出版年不明)にメモを書きつけていた。

(77) 中村繁次牧師は『鉄の独語』に追悼文を寄せていた。「大正四年でしたか、大連西広場教会で、木村伝道のあと、佐藤さんと私とは、大勢の人々と一緒に、三吉牧師から洗礼を受けました。故人を識ったのは、その前後ですから、既に五十年になります。その間、私は故人の人柄と信仰に対して、尊敬と親しみを覚えて参りました」と述べている(佐藤英雄著、佐藤もと編『鉄の独語』私家版、一九六三年、八三―八四頁)。中村と佐藤は「旧

西広場の会」においても交流していた。

(78) 財団法人満鉄会編『満鉄最後の総裁 山崎元幹』財団法人満鉄会、一九七三年、七四四頁。

(79) 中村繁次「山崎さんと私」佐藤晴雄編『満鉄会報』財団法人満鉄会、八二号、一九七二年、一四頁。

(80) 同上、一四頁。

(81) 露木賢一長老聞き取り (二〇二三年一月一六日)。当時、教会執事として山崎元幹宅を訪問していた上村清長老もまた、山崎が元満鉄総裁であったことは議論とならなかったと回想する(二〇二二年二月二五日)。

(82) 財団法人満鉄会編『満鉄最後の総裁 山崎元幹』財団法人満鉄会、一九七三年、七四八頁。

(83) 同上、七四九頁。キリスト教式の告別式では、中村繁次牧師が司式した。

(84) 中村繁次「山崎さんと私」佐藤晴雄編『満鉄会報』財団法人満鉄会、八二号、一九七二年、一四頁。

(85) 藤原亮牧師の令嬢がこれまで写真を保管してお

り、二〇二二年九月に教会に寄贈された。

- (86) 山崎元幹追悼集の編集「方針」は、遺稿を主体として「山崎元幹は、山崎元幹をして語らしめよ」というものであった（「山崎会長記念出版について」佐藤晴雄編『満鉄会報』財団法人満鉄会、七九号、一九七二年、三頁）。そのため、藤原牧師の追悼文は後日『満鉄会報』に掲載された（藤原亮「故山崎さん一周年記念祭に際して『モーセの死』」佐藤晴雄編『満鉄会報』財団法人満鉄会、七八号、一九七二年、一八頁）。教会には関連書簡と満鉄会からの寄付金納入記録が残されている。
- (87) 馬場康夫牧師からの聞き取り（二〇二三年一月二日）。
- (88) 湯川真樹江「留魂碑建立をめぐる満鉄の記憶と表象——『山内丈夫編纂資料』の生み出される背景に着目して」『日本オーラル・ヒストリー研究』一三号、二〇一七年。
- (89) 財団法人満鉄会編『満鉄最後の総裁 山崎元幹』財団法人満鉄会、一九七三年、七四二、七五七頁。
- (90) 遠藤淳子・篠原操子・渡部聰子・池宮恒子『星のように——渡部守成牧師小伝』私家版、一九八五年、二一頁。
- (91) 篠原操子「外地での敗戦で得た宝物」公主嶺農業試験場会『わが追想の公農試』第一集、一九九二年、四四―四五頁。
- (92) 『わが追想の公農試』は第三集まで刊行し、第四集より『公農試会だより』と改めた。
- (93) 篠原操子「天からの贈りもの」公主嶺農事試験場会『公農試会だより』第六集、一九九七年、一〇―一一頁。
- (94) 佐藤英雄著、佐藤もと編『鉄の独語』私家版、一九六三年、五二頁。
- (95) 現在の教会方針は次のように定められている。「日本基督教団神奈川教区には、福音理解の不一致、社会的・政治的偏向が未だに強く残ったままです。

聖書が神の言葉であることの権威が軽んじられ、
説教・聖礼典に乱れが生じています。勿論、キリ
スト者として社会的な関心を失うことなく、一人
一人の責任において社会との関わりを持つことは
間違つてはいませんが、教会自身が社会団体化・
政治団体化することは、厳に戒めるべきことであ
ると考えています」。日本基督教団神奈川連合長
老会小田原十字町教会「小田原十字町教会 教会
歴史・教会基本方針・礼拝・伝道・奉仕」(二〇一四
年四月二日定期教会総会において改訂)。

謝辞

小田原十字町教会の馬場康夫牧師、露木賢一長老、篠原操子長老のご令嬢、藤原亮牧師のご令嬢にはインタビュー
へのご対応や関連資料をご提供いただいた。この場を借りて感謝申し上げます。

本研究は学習院大学東洋文化研究所「東アジア学」共創研究プロジェクト(二〇二一年度)の助成を受けた。

